

兵士というもの

ドイツ兵捕虜盗聴記録に見る戦争の心理

ゼンケ・ナイツェル ハラルト・ヴェルツァー

小野寺拓也訳



みすず書房

SOLDATEN

Protokolle vom Kämpfen, Töten und Sterben

by

Sönke Neitzel and Harald Welzer

兵士というもの——ドイツ兵捕虜盗聴記録に見る戦争の心理 目次

First published by S. Fischer Verlag GmbH, Frankfurt am Main, 2011
Copyright © S. Fischer Verlag GmbH, Frankfurt am Main, 2011
Japanese translation rights arranged with
S. Fischer Verlag GmbH, Frankfurt am Main through
The Sakai Agency, Tokyo

カバー写真 一九四三年八月もしくは九月のロシアにて撮影。兵士たちへの鉄十字章の授与。
(写真提供 Das Bundesarchiv)

プロローグ 1

第1章 戦争を兵士たちの視線から見ると参照枠組みの分析 11

基礎的な方向づけ——ここではいったい何が起きているのか 15

文化的な拘束 18

知らないということ 19

予期 21

認識における時代特有の文脈 22

役割モデルと役割責任 23

「戦争は戦争だ」という解釈規範 27

形式的義務 30

社会的責務 31

さまざまな状況 35

個人的性格 37

第2章 兵士の世界 39

「第三帝国」の参照枠組み 40

戦争の参照枠組み 56

第3章 戦う、殺す、そして死ぬ 71

撃つ 72

自己目的化した暴力 77

冒険譚 82

破壊の美学 88

楽しさ 91

狩り 93

撃沈する 97

戦争犯罪——占領者としての殺害 102

捕虜にたいする犯罪 118

絶滅 127

絶滅の参照枠組み 147

射殺に加わる 165

憤激 172

まともであること 179

噂 183

感情 187

セックス 195

技術 206

勝利への信念	224
総統信仰	241
イデオロギー	261
軍事的諸価値	272
イタリア兵と日本兵	323
武装SS	329
まとめ——戦争の参照枠組み	356

第4章 国防軍の戦争はどの程度ナチ的だったのか 361

補遺 386

謝辞 394

訳者あとがき 397

原註 15

文献 7

索引 1

プロローグ

プロローグ1 ゼンケ・ナイツェル

イギリスの一月にはよくある一日だった。低く垂れ込めた雲。霧雨。気温八度。以前と同様に私は地下鉄デイストリクト線に乗り、ロンドン南西部にあるキュー・ガーデンズ駅まで行き、絵のように美しい駅で降りて、イギリス国立公文書館までの道のりを急いだ。古文書の中に埋もれるためだ。雨はいつも以上に不快で、自然と足が急いだ。いつものように、入口のあたりにはかなりたくさん警備員がおり、私の鞆の中をささっとかき回した。小さな書店を通り過ぎてクロークまで行き、閲覧室への階段を上がっていった。緑色がまぶしい絨毯を見て、前回ここに来たときと何も変わっていないことを確認した。

二〇〇一年秋、私はグラスゴー大学の客員講師として勤務しており、短期間のロンドン訪問が許可された。数週間前、大西洋の戦いにおける転換点となった一九四三年五月についてのマイケル・ギャノンの本「秋山信雄訳『ドラムビート——Uボート米本土強襲作戦』光人社、二〇〇二年」を読んでいたときに、私はある記述にぶつかった。Uボートの

ドイツ人乗組員の盗聴記録が、数ページにわたって転載されていたのである。私はそれに興味を持った。ドイツ兵捕虜の尋問記録が存在したことは知っていたが、秘密の盗聴報告書については聞いたことがなかった。この痕跡をなんとしてもたどってみたいとなった。もともと、それほど興奮するような記述が出てくるとは思っていなかった。どんなことが報告されているのだろうか。どこかで誰かが録音した、脈絡のない会話が数ページ程度といったところだろうか。新史料ではないかと希望を持ってみたものの結局は袋小路に行きづまったという経験は、過去に数え切れないほどあった。

しかし今回は違った。私の小さな仕事机の上には、一本の紐で結わえただけの、八〇〇ページはあろうかという書類の束が置かれていた。薄い紙の山はまだきれいで、互いにきちんと積み重ねられていた。私は、これを手にしたばかり初めての人間に違いない。私の視線は、ドイツ海軍の将兵たち、多くはUボート乗組員たちの会話を一言一句書き留めた果てしない会話記録の上をすべっていった。一九四三年九月だけで八〇〇ページあった。九月の報告書があるなら、一九四三年一〇月や十一月のものもあるに違いない。他の年はあるだろうか。そして実際、他の月についても分厚い束があった。私は氷山の一角にぶちあたったのだとい

うことが、徐々にわかってきた。興奮した私は、次から次へと文書を請求した。Uボートの乗組員だけでなく、明らかに空軍や陸軍の兵士たちも盗聴されていた。私は彼らの

会話を徹底的に読み込むなかで、私の眼前に広がる戦争の内なる世界へとまさに引き込まれていった。兵士たちの語りが文字通り聞こえ、その身振りや議論が見えたのである。とくに驚いたのが、戦闘や殺害、死について彼らが率直に語っていたことだった。興味深い箇所を少しばかりコピーし、鞆に詰め込んでグラスゴーへと戻った。次の日、歴史研究所で偶然ベルナルド・ワッサースタイン教授に出会い、私の発見したものについて説明した。まったく新しい史料だし、誰か学生に博士論文のテーマとして託してもいいんじゃないか、と私は言った。「他の誰かに託しちゃうのかい？」驚いて彼はこう尋ねた。この言葉が、私の頭の中でずっとこだましていた。いいや、彼は正しい。この宝は、私自身が掘り出さなくてはならない。

それから私は何度もロンドンに通って、私が遭遇したものがいったい何であるのか、理解することにした。イギリス軍は第二次世界大戦中に数千人のドイツ兵捕虜と数百人のイタリア兵捕虜を組織的に盗聴し、とくに興味深いと思われる会話の箇所は蠟管蓄音機で録音して、そこから記録を作成していた。すべての記録は戦後も保存され、一九九

六年に公開された。しかしその後もこの史料の重要性を誰も認識しなかったため、閲覧されることのないまま文書館の書架に埋もれていた。

二〇〇三年に私は抜粋を初めて刊行し、二年後にはドイツ軍将校の盗聴記録をおよそ二〇〇ページの史料集として出版した。しかしそれでも、この史料の評価や解釈は最初の一步を踏み出したにすぎない。その後すぐにワシントン国立公文書館で同様の史料に遭遇したが、一〇万ページ相当と、イギリスのもの二倍の分量があった。このような大量の文書を、私一人で分析することは不可能であった。

プロローグ2 ハラルト・ヴェルツァー

ゼンケ・ナイツェルが私に電話をかけてきて、彼が発見した史料について報告したとき、私は言葉を失った。暴力はどのように認識されてきたのか、他人を殺そうとする意志はどのように生じるのかを我々は今まで研究してきたが、その際、捜査記録、野戦郵便、目撃証言、回想録といった非常に問題含みの史料に依拠せざるをえなかった。これらすべての史料にはきわめて大きな問題点がある。そこでなされる発言や報告、描写はすべて、ある特定の人間に向けて意識的に行われている。たとえば検事、故郷の妻、ある

いは公衆に向けて。人はさまざまな理由から、彼らにたいして自分のものの見方を伝えようとするのだ。しかし収容所における兵士たちの会話は、何らかの意図をもってなされるものではない。彼らが説明したり語ったりしたことがいつか「史料」になる、ましてや出版されるなどということは、誰一人考えもしなかったであろう。捜査記録や自叙伝、インタビューの場合、報告する語り手は、出来事の結末がどうであったかを知っており、彼らの体験や見方は、こうした後づけの知識によってすでに書き換えられてしまっている。それにはたいしてナイツェルが発見した史料では、男たちは戦争について、そしてそれにどのような態度を取るのかについて、同時代的に語っているのである。この史料こそ、国防軍だけでなく、おそらくは軍隊一般の心性史についてじつに比類のない、新しい視座を切り開いてくれるのである。強い衝撃を受けた私は、すぐに彼と会う約束を取り付けた。はつきりとしていたのは、私が社会心理学者としてこの史料を分析する上で、国防軍にたいする深い知識が不可欠だということであった。逆に歴史的な観点だけでは、会話記録の中のコミュニケーション的、心理的な側面を解読することはできない。我々はともに、かつて「第三帝国」の時代について集中的に仕事をした経験があるが、捕虜たちの会話をまったく違った観点から見ている。社会

心理学と歴史学という我々の専門領域を結びつけることによってのみ、この比類ない心性史的な史料への入口をきちんと確保し、兵士たちの振る舞いへの新たな視点を得ることができる。ゲルダ・ヘンケル財団とフリッツ・テュッセン財団を説得し、自分たちの計画について、すぐに大規模な研究プロジェクトをスタートさせることを認めてもらった。こうして我々は、初回の会合のあと間もなく、見通しがきかないほど大量の文書へと一斉にとりかかるための研究グループ⁽¹⁾の資金を調達したのである。イギリスの文書すべてとアメリカの文書の大部分はデジタル化し、内容分析ソフトによって分析を行った。三年以上にわたる集中的な、わくわくするような共同作業によって我々自身多くの新しいことを学んだし、今まで当たり前だと思ってきたことが、この史料によって覆されたことを認めざるをえないこともあった。本書は、こうした我々の最初の研究成果を提示するものである。

兵士たちは何を語ったか

シュミット「二人の一五歳の若僧についての話を聞いたことがある。奴らは軍服を着ていて、残りの奴らと一緒に撃ちまくってたんだ。だが、捕虜になった。[...]ロシア軍には青二才も入っているんだ。それどころか一二歳の幼

いやつが軍楽隊にいて、軍服も着てるんだ。俺はそれを、

この目で見た。俺たちの部隊にはかつて「捕虜となった」

ロシア兵の軍楽隊がいて、いい演奏してくれたんだ。でき
すぎなくらいだった。彼らの音楽には、感情の深みとか切
なさがあってねえ。ロシアの広大な情景が頭に思い浮かん
ださ。素晴らしかった。ものすごく楽しかった。それが軍
楽隊だった。「…」とにかく二人の若者たちは、西に向か

って歩いていかなきゃいけなかった。通り沿いに。次のカ
ープにさしかかったところで森へとさっと走り込もうと思
った刹那、弾丸をくらった。通りから足をひきずりながら
立ち去ろうとしていたとき、敵からは丸見えだったが、彼
らは素早く姿を消した。彼らを探るための大部隊がす
ぐに編成され、探さなくちゃいけなくなつた。「…」そし
て二人を捕まえた。二人ともいっぺんに。「部隊の連中は」
落ち着いていて、その場で彼らを撲殺したりはしなかった。
もう一度連隊長のところまで連れて行つた。そしてそこで、
彼らは死ぬことに決まつた。彼らは自分たちの穴を掘らな
きゃいけなかつた。二つだ。そして一人が射殺された。一

人は墓穴には落ちず、穴の前方に覆い被さつた。もう一人
は、射殺される前にそいつを穴の中に落とすよう命じられ
た。それを彼は笑顔でやってのけたんだよ！ 一五歳の若
僧がさ！ 狂信なのか、理想主義なのか、とにかくたいし

たものじゃないか！」

シユミット曹長が一九四二年六月二〇日に語つたこの話
は、盗聴記録における兵士の語りとして典型的なものであ
る。日常会話が一般的にそうであるように、語り手は連想
的に話題を変更する。会話の最中に、「音楽」というキー
ワードでロシア音楽がいかに好きだったかを思い出してこ
れを簡潔に述べ、それから本来の話をつたたび語り出す。
はじめは他愛なかつた会話が、最後には恐ろしいものとな
る。二人の若いロシア兵が射殺されるのである。若者たち
は単に射殺されただけではなく、殺される前に自分で穴を
掘らなければいけなかつたことが、語り手によって報告さ
れる。射殺にさいして面倒なことが起き、これによってこ
の話の最終的な教訓が語られることになる。殺されようと
していた若者は「狂信」的もしくは「理想主義」的である
ことが証明されたのである。そして軍曹はそれになりたいす
る。驚嘆の念を表明している。

戦争、敵の兵士、若者、音楽、ロシアの広大さ、戦争犯
罪、驚嘆の念といった数多くのテーマがセンセーショナル
なかたちで結びついていっているさまを、まずは読み取ること
ができる。すべては一見お互いに関係していないように見え
るが、しかしひとつながりの話として一気に語られるので

ある。これがまず最初に確認できることである。つまり、

ここで語られる話は我々が期待するものとはまったく違う
ということである。まとまりや一貫性、論理といった基準
には従っていない。会話の相手の興奮を呼び覚まし、興味
をもたせ、コメントをしたり自分の話を付け加えたりして
もらうための空間やきっかけを用意するための会話なので
ある。この点において、あらゆる日常会話同様、兵士たち
の話も飛躍が多いが、それ自体が興味深いものだし、断絶
にあふれているが、語りの導きの糸として新たな話題を結
びつけることにもなる。何より会話は、コンセンサスと一
致を目的としているのだ。人間が会話をするのは情報交換
のためだけではない。関係を構築し、共通点をつくり出し、
自分たちは同じ世界を共有しているのだということを確か
めるためでもあるのだ。兵士たちの世界は戦争の世界であ
り、そのことが彼らの会話を非日常的なものとしているが、
それが非日常的なのはあくまでこんにちの読者にとつての
みのことである。兵士たち自身にとつては、まったくふつ
うの会話である。

戦争の残酷さや過酷さ、冷酷さはこうした会話において
日常的な要素であるが、出来事から六〇年以上経過したあ
とで会話を読む我々にとつて、そのことはつねに驚きをも
たらす。思わず呆れたり、動揺したりしてしまうし、理解

できずに当惑することも多い。しかし、自分の世界ではな
く兵士たちの世界を理解しようとするのであれば、そうし
た道徳的反応は克服する必要がある。残酷さの日常性が示
しているのは、要するに次の点に尽きる。殺害や極端な暴
力、語り手や聞き手の日常に属しており、並外れたこと
ではなかつた、ということだ。彼らは何時間でもそのこと
について議論している。彼らはたとえば、航空機や爆弾、
レーダー装置、都市、風景、女性といったことについても
話をしている。

ミュラー 俺がハリコフにいたとき、都市の中心部はすべて
破壊されていた。素晴らしい町だった。素晴らしい思い出よ。
みんな少しだけドイツ語が話せるんだ。学校で学んだらしい。
タガンロークでも映画館は素晴らしかったし、海岸のカフェも
見事だった。「…」ドン川とドネツ川が合流するあたり「黒海
北東部沿岸、ロストフ・ナ・ドヌーのあたりか」で、何度も飛
行したね。いろんなところに行つた。風景も美しかった。トラ
ックでいろんなところに行つた。いたるところで、強制労働奉
仕をしている女性も見たな。

ファウスト おお、そりゃひどい。

ミュラー 彼女たちは道路を建設していたんだが、とんでも
なくきれいな娘さんたちでね。俺たちがそこを車で通り過ぎた

ときに、彼女たちをトラックにちよいと引きずり込んで、ヤツ
てから、もう一度ほいっと外に放りだしたもんだ。彼女たちの
罵りようといったら！⁽³⁾

男たちの会話はこのようなものであった。空軍の上等兵
と軍曹の二人は、ロシア戦線の旅行としての側面について
話をしている。「素晴らしい町」とか、「素晴らしい思い
出」とか。突然話題は、強制労働をさせられていた女性に
たいして率先して行った強姦へと切り変わる。上等兵はこ
の話を、ささやかなちよつとした逸話であるかのように口
にしてから、自分の旅行についての描写へと移る。この例
からは、盗聴されている会話において、何をどこまで言っ
ても許されるのか、どのような発話が期待されているのか
を読み取ることができる。ここで述べられている暴力のど
れひとつとして、聞き手の期待に反するものはない。射殺、
強姦、略奪に関する話は、戦争の語りにおいて日常的にな
される一般的なものであった。そのようなテーマを耳にし
たからといって、論争や道徳にもとづく抗議、ましてや喧
嘩になるなどということはほとんどなかった。内容が暴力
的なものであったとしても、会話自体はつねに和やかに行
われた。兵士たちは互いを理解し、同じ世界を共有し、自
分たちが関わっていた出来事や、目撃したり自ら行ったこ

とについて情報を交換した。彼らはこうしたことを、一定
の社会的、文化的、状況的枠組み、すなわち参照枠組みの
中で説明し、解釈していた。

我々が本書で再構築し、描写しようとするのはこの参照
枠組みである。兵士たちの世界はどのようなものであった
か。彼らは自分自身や敵をどのように見ていたのか。アド
ルフ・ヒトラーやナチズムについて何を考えていたのか。
戦争がすでに敗色濃厚であったときでさえも戦い続けたの
はなぜか。こういったことを、参照枠組みを通じて理解し
たい。

さらに我々が調査したいのは、この参照枠組みのうち何
が「ナチ的」だったのか、ということである。そのほとん
どが親切で濃厚であった捕虜収容所の男たちは、「絶滅戦
争」において見境なく人種主義的犯罪を行い大量殺戮に手
を染めるために戦争へと赴いた、「確固とした世界観にも
とづく戦士」だったのだろうか。それは、一九九〇年代に
ダニエル・ゴールドハーゲンが描き出した「自発的な死刑
執行人」というイメージ^{*}、あるいはハンブルク社会科学研
究所によるふたつのバージョンの「国防軍展」^{**}や、国防軍
犯罪に関する数多くの歴史研究が明らかにしてきたより緻
密なイメージに、どの程度合致するものなのだろうか。現
在支配的な見解は、国防軍兵士たちは巨大な絶滅機構の一

は、彼らの観察や会話は、一般的に想像されるものとは異
なるということである。こんにちの我々とは違い、戦争の
結末がどうなるか、「第三帝国」や「総統」がどのような
経過をたどるのかということを彼らは知らない、ということ

部だったのであり、したがって未曾有の大量殺戮の死刑執
行人ではなかったにせよ、それに関与したことは確かだと
いうものである。民間人の射殺からユダヤ人男性、女性、
子供の組織的な殺害に至るまで、ありとあらゆる犯罪に国
防軍が荷担したことは、否定できない事実である。しかし
それによって、個々の兵士たちが犯罪に関わったのかどう
か、とくに彼らがそれとどのような関係を持っていたのか、
すなわち彼らはそうした犯罪に積極的に荷担したのか、
嫌々ながら犯したのか、あるいはまったく行わなかったの
か、ということまで明らかになるわけではない。我々の史
料は、そうしたことについて詳細な情報を提供してくれ
しかもそれは、「国防軍」についての固定観念を揺るがす
可能性をも秘めている。

その際注意する必要があるのは、人間は先入観や偏見を
まったく抱かずに何かに出会うということは不可能であり、
つねに特定のフィルターを通じて認識しているということ
である。あらゆる文化、あらゆる歴史事象、あらゆる経済
の形態、要するにあらゆる存在が認識規範や解釈規範に影
響を与え、それによって体験や出来事の認識や解釈が行わ
れる。同時代史料である盗聴記録が示すのは、兵士たちは
戦争をどのように見ていたのか、それについてどのように
理解していたのかということである。我々が本書で示すの

* (訳註) ダニエル・J・ゴールドハーゲン、望田幸男監訳「普通
のドイツ人とホロコースト——ヒトラーの自発的死刑執行人たち」
(ミネルヴァ書房、二〇〇七年)。ホロコーストに荷担した人々は
「排除主義的反ユダヤ主義」の正しさを確信しており、ユダヤ人殺
害を正当なものと考えていたからこそ、殺人を回避したり殺人機
関から離脱するのではなく、殺害命令を実行したのだとゴールド
ハーゲンは主張した。こうした単一原因論的な議論は大きな反響
や反発を呼び、「ゴールドハーゲン論争」とよばれる一連の論争が
一九九〇年代後半に欧米で盛んに行われた。

** (訳註) 「国防軍展」(正式名称「絶滅戦争——国防軍の戦争犯
罪 一九四一—一九四四」)は、一九九五年にハンブルクを皮切り
にスタートし、以後四年間で独逸の三三都市を巡回した展示会で、
ドイツ国防軍が第二次世界大戦中に東部戦線で犯した戦争犯罪を
テーマとしていた。組織として国防軍が犯罪的な絶滅戦争に荷担
したことを、写真、野戦郵便、証言などパーソナルな史料を数多
く用いて明らかにした。戦争犯罪に加担したのは親衛隊であり、
国防軍はあくまで戦争法規に則り「通常の」戦争を遂行したのだ、
という社会にまだまだ根強く残る「清潔な国防軍」神話を打破する
ことが、この展示会の狙いであった。この写真のうち、国防軍で
はなくNKVD(ソ連内務人民委員部)などによる残虐行為を写
した写真が紛れ込んでいたため、展示会はいったん中止された。
調査委員会による答申を受け(誤用が明らか写真は、一四三三
枚のうち二〇枚以下と判明)、写真ではなく文字中心の展示会が、
装いを新たに二〇〇一年一月にベルリンで再開された。

が、とくに大きい。彼らが夢見た、あるいは現実のものと

なった未来は、我々にとってはすでに遠い過去となったが、しかし彼らにとつては依然として開かれた空間なのだ。イデオロギー、政治、世界秩序といったようなものに、彼らは概してほとんど興味がない。彼らが戦争で戦うのは何か確信があるからではなく、自分が兵士だからであり、戦うことが彼らにとつての仕事だからである。

確かに反ユダヤ主義者は多かったが、しかしそのことと「ナチ」であることとはイコールではない。他人を殺そうとする意志とも無関係である。確かにユダヤ人を憎んではいたものの、ユダヤ人の射殺を目の前にして憤った者も少なくない。断固たる反ナチでありながら、ナチ体制の反ユダヤ主義政策を明確に支持していた者もいた。数十万人のロシア兵捕虜が餓死するままに任されているのを見て動揺しながらも、彼らを監視し、輸送することが自分たちにとつて厄介で危険なことだと見て取るや、彼らを射殺することに躊躇しなかつた者もいる。ドイツ人があまりに「人道的」すぎることは問題だと不満を漏らし、ある村の住民全員を虐殺した様子を一気に語った者もいる。多くの語りにおいて、堂々と誇らしげに自慢する様子が見られるが、しかしそれはこんにちの男同士の話においても一般的であるような、自分自身の能力や自分の車の性能の誇示にとど

まらない。兵士同士の会話では、極端な暴力行為、強姦、

敵機の撃墜、商船の撃沈といったことも語られる。これらの報告が事実ではなく、他人を驚かせるために言っているという事例もときおり確認できる。たとえば、子供を輸送している船を撃沈したなどと言って、印象づけようとするのである。このようにこの空間では、何をどこまで言つてよいか、何を語りうるかの境界線がこんにちとはまったく異なる。したがって、何によつて他人の賞賛を受けるか、もしくは少なくともそれを期待できるのか、その基準もまったく異なる。暴力的であるということは、当時は明らかにそのカテゴリーの一部であった。また、ほとんどの語りの内容は、一見きわめて矛盾しているように見える。しかしそれは、彼らが何らかの「態度」にもとづいて行動しており、そうした態度はイデオロギーや理論、強い確信と結びついているというふうに見えるからこそ、矛盾しているように見えるのである。

本書で示すように実際の人間は、自分は他人からこのよ
うなことを期待されているのではないかと考えながら行動
している。それは抽象的な「世界観」よりも、きわめて具
体的な場所、目的、機能、とりわけ自分が属している集団
といったものと密接に関係している。

なぜドイツ兵は五年にわたつて、未曾有の激しさをもつ

て戦争を戦つたのか。五〇〇〇万人が犠牲となり、ヨーロッパ大陸全体を荒廃させた暴力の噴出になぜ荷担したのか。これを理解し説明するためには、彼ら自身が戦争を、彼らの戦争をどのように見ていたのかを知る必要がある。以下の章ではまず、兵士たちのものの見方の原因となり、これを規定していたいくつかの要素、すなわち参照枠組みについて詳しく考察する。「第三帝国」や軍隊の参照枠組みに興味はなく、暴力や技術、絶滅、女性や「総統」についての兵士の語りや対話に関心があるという読者は、第3章以降から読んでいただきたい。戦闘や殺害、死についての兵士たちの見方を詳しく見たあとで、国防軍の戦争を他の戦争と比較する。これは、この戦争の何が「ナチ的」で何が「ナチ的」ではなかつたのかを明らかにするためである。この場で前もつて言えることがあるとすれば、それは本書の結論がときとして予期しないようなものとなるだろうということだ。